

それでは、マタイの福音書 16 章 13 節から 18 節をお開き下さい。『¹³さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々は人の子をだれだと言っていますか。」¹⁴ 彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています。」¹⁵ イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」¹⁶ シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」¹⁷ するとイエスは、彼に答えて言われた。「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。¹⁸ ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。』ここでまず 13 節のところでお読みした「人々は人の子をだれだと言っていますか。」と。イエスが弟子たちに投げかけた質問ですけれども、“人の子”というのはイエス・キリストが好んで使ったご自身のタイトル、称号、肩書きのことです。イエスは自分のことを“人の子”と呼ばれました。80 回以上もご自身のことを“人の子”と呼ばれたわけですが、そして 15 節のところにも、もう一度その質問を言い直して、繰り返しています。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」あなた方は。ここにいる皆さんにもイエス・キリストは問い掛けています。「あなたがたは、わたしを（イエスを）だれだと思えますか。」と。言いますか、ということです。イエスは一体どなたなのか、どういう方なのか。これは人間にとって最も重要な質問であります。これ以上重要な質問は他にないということも覚えて欲しいと思います。何故ならば、これは死活問題にかかわるからです。このイエス・キリストをどう見るかによって、その人の運命が決まってしまうからです。だから「イエスとは誰か。」という質問、これは人にとっては最も重要な質問となっています。あなたにとって、イエスとは何者か、どんなお方なのか。あなたのキリスト像、キリスト・イメージとは一体どんなものか。一般的にはイエス・キリストと聞けば、「キリスト教の開祖ではありませんか。イエス・キリストがキリスト教を開いた開祖、教祖のようなお方ではないでしょうか。」という答えも返ってきそうです。または、「イエスは偉大な思想家、道徳の教師、聖人の 1 人。ソクラテスやお釈迦さん、マホメット、これらに並ぶ聖人の 1 人ではないでしょうか。」そういう質問も返ってきそうです。ちょうど今お読みしたマタイの福音書 16 章で、イエスはこの質問を弟子たちに投げかけたわけですが、当時の、当時というのは今から 2,000 年前です。日本で言う弥生時代の人たちに対して、イエスの時代においてイエスに対する人々の評価はどうであったのか。そのことが今お読みしたところにあります。

ある人たちは 14 節のところ「バプテスマのヨハネではないでしょうか。」イエスのことをバプテスマのヨハネではないでしょうかと評価する者もおりました。バプテスマのヨハネという人はイエス・キリストの半年年上のいとこです。イエスが来る前に、来たるべき救い主、キリスト、メシヤはどんなお方なのかということを示して、「この方が来られるのを準備して待つて備えなさい。」とすることをミニストリーとした、働きとしたキリストの先駆者と呼ばれる者です。このバプテスマのヨハネという人のイメージというのは、悔い改めを強調する人でありました。当時ガリラヤという地方において国主はヘロデ・アンテパスという人でしたけれども、このヘロデ・アンテパスという人が、兄弟のピリポという人の妻のヘロデヤを、自分の兄弟の妻を娶った^{めと}ということをして、「これは不貞の罪である。姦淫の罪である。倫理に反する。」ということで、真っ向から指をさして断罪して、非難をしたわけです。それによってバプテスマのヨハネは捕らえられて、最終的には首をはねられて刑死してしまうわけですが、そのバプテスマのヨハネがもう一度今蘇ってここに現れたんだ。それがイエスであると言う人々の評価がありました。バプテス

マのヨハネといえば、そのように悔い改めを強調する人、社会の不正を正す社会改革者。それとイエスを重ねたわけです。イエスのイメージとは悔い改めを強調する社会改革者、バプテスマのヨハネではないか。ヨハネの再来といったようなイメージでありました。

また他の人たちは同じく今読んだ**マタイ 16:14**に「**エリヤだと言う人もあります。**」と。エリヤというのは旧約聖書に登場する預言者の代表格です。沢山の預言者が出てきますが、エリヤという預言者は、そうした旧約聖書の預言者の代表であります。この人はたくさんの奇跡を行いました。死人を蘇らせるような奇跡も行いました。ですからこのエリヤという人を見るときに奇跡というものが強調される。この人はミラクルメーカーである。不治の病を癒してしまう神癒者、**healer**であると。イエスのことをそのように人々は評価しました。この人は奇跡を行なうミラクルメーカー。病気を癒してくれる神癒者、**healer**であると。

またある人は、**エレミヤだというふうにも言いました。**エレミヤという人も旧約聖書に登場する有名な預言者で、**エレミヤ書**という書を書いている人です。この人は涙の預言者というふうにも評価される人で、とにかく神様のことを伝えた伝道者でもありました。ですからエレミヤと聞くと人々のイメージは伝道を強調する人、宣教活動を強調する人。イエスをそのように見たわけです。

またある人は、**預言者のひとりではないか。**これはちょっとあいまいな表現であるように思うかもしれませんが、これも旧約聖書に出てくる立派なキリスト、メシヤの別の称号であります。この**預言者のひとり**という表現は、メモだけして頂ければと思うんですが、**申命記 18:15**に登場します。そこにはモーセのような預言者が再び現れるという予告があります。預言と言うものです。その者は来たるべき救い主、メシヤとなるということなんですけれども、ですからこの**預言者のひとり**というのは、モーセのような預言者。第二のモーセとも呼ばれる存在です。で、モーセと聞けば皆さんはもう有名な人だから分かりますけれども、エジプトの圧政からイスラエルの民を救い出した解放者であります。400年間イスラエルの民は世界最強の、当時は世界最強の国がエジプトでありましたけれども、そのエジプトの圧政から見事救い出した解放者、これがモーセでした。ですからモーセは出エジプトの革命家だったわけです。それと同じようにイエスのことを見たわけです。イエスもまたモーセのような解放者、改革者である。イエスの時代は、今から2,000年前、ちょうどイエスはイスラエルの民の1人として、ユダヤ人としてローマ帝国の圧政に生まれたわけです。圧政のもとでイスラエルは自分の国の再興を、自分の国の独立というものを常に願っていたわけなんですけれども、イエスこそがそのようなローマからイスラエルの民を救い出してくれる解放者となる、革命家となってくださるお方。このお方は、もうひとりの預言者、そして第二のモーセであるというふうには人々は期待をしたわけです。

まあ、いろいろとイエス像、キリスト・イメージというものが人々の間にあったわけなんですけれども、その中でイエスは、一般にはそのように私のことを見ているようだけれども、あなた方弟子たちは私のことをどのように見ているのか、どのように捉えているのか。それが**15節**のイエスの質問でした。「**あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。**」それに対してシモン・ペテロという弟子たちの中のまさに代表です、シモン・ペテロが「**あなたは、生ける神の御子キリストです。**」と。これは模範解答です。イエスは、生ける神の子キリストです。これを別の言い方で言うならば、**イエス・キリストは救い主なる神様です**と。で、これは模範解答でした。イエス・キリストがそのことを喜ばれて**17節**で『**するとイエスは、彼に答えて言われた。**』私の心の中では、イエスがここでニンマリ笑いながら、笑みをたたえながら、喜びながら『**「バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。**』と。そして**18節**に注目して下さい。『**ではわたしもあなたに言います。**（イエスが何者であるのか、ペテロははっきり分かりました。理解しました。イエスは、生ける神の御子キリストです。救い主なる神ですと。人々はそのようには思っておりませんでした。本当の姿、イエスの本当の姿をペテ

口は理解したわけです。それに対してイエスはペテロにも言います。) **あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。』**と。ここでシモンと言う名前の意味も紹介しておきたいと思えます。シモンという名前の意味は、語源を辿っていくと「うごめく砂」英語で言えば shift in sand となります。シモンという名前の意味は「うごめく砂」です。で、ペテロと言うのは、実はこれは本名ではなくてイエスが彼に与えたニックネームです。あだ名です。これより3年前に初めてイエスはペテロと出会った時に、「**あなたはシモンです。でもこれからは私はあなたのことをペテロと呼びます。**」と。このことはヨハネの福音書 1:42 書いてあることなのですが、シモンという名前の意味は「うごめく砂」。ではイエスが彼に与えたニックネーム、あだ名のペテロとは一体何の意味なのか。それは「岩」という意味です。ペテロの意味は「岩」です。シモンの意味は「うごめく砂」です。シモンのほうは何か揺れ動く不安定な、そんなイメージがあります。ペテロの「岩」という名前の意味は、動かない不動のもの、どっしり落ち着いたもの、というイメージをもたらしものであります。で、イエスはここでシモンのことを「あなたはペテロです。」と。「あなたのアイデンティティーはペテロなんだ。」と説明されました。参考までにその 18 節のところではイエスは「**あなたはペテロです。**」と言われましたけれども、その後「**わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。**」とおっしゃいました。教会は岩の上に建てられると書いてありますけれども、ローマカトリックの人たちはこの「岩の上」の「岩」というのを「ペテロの上」というふうに勘違いして理解してしまっております。で、実際にペテロの後継者は、ローマ教皇と呼ばれる存在で、ローマ教皇が教会の土台であると。ローマ教皇、ローマ法王ともいいますが、そのローマ教皇、ローマ法王こそが教会の最終権威であると。教会の頂点に立つのがローマ教皇であると、ローマカトリックの方々はそのように捉えて、これは誤解なんですけれども、そのローマ教皇に絶対的な権威を与えております。その元は今読んだ聖句です。ところが実際に厳密に読んでいきますと、「**わたしはこの岩の上**」の「岩」というところ、皆さんの持っている新改訳聖書には*印が2つ付いているものもあると思えます。で、欄外を見ていただくと脚注のところにも2つの*印は、ギリシャ語で「ペトラ」と言います。で、その前にペテロというところにも1つ*印が付いています。ペテロの名前の意味は「岩」と言いましたが、これはギリシャ語では「ペトロス」と正確には発音します。ですから、確かにペテロの名前の意味は「岩」ですけれども、でも原文では、ギリシャ語では、若干ボキャブラリーが違ふんです。単語の違いがあります。「**あなたはペテロです。**」または正確には「**あなたはペトロスです。**」 「岩」という意味です。で、「**わたしはこの岩の上**」の「岩」というのは、「ペテロ」ではなくて、または「ペトロス」ではなくて、「ペトラ」とであると。「ペトラ」というのはどういう意味か。「岩」という意味ではあるんですけれども、実際には岩盤のような一枚岩です。なかなかイメージがつかないと思えますけれども、有名なオーストラリアのエアーズロックか何かをイメージして頂いても構いません。巨大な岩盤です。実際にイエスがこの言葉を語られた舞台もピリポ・カイザリヤというところは非常に美しいリゾート地ですけれども、ここには巨大な岩盤があります。それはちょうどイエスが多分指をさして言われたものだと思います。「**見てみなさい。このペトラを、この岩盤を。**」と。「**わたしはこのように揺るがない岩盤の上に教会を建てます。**」と。で、その「ペトラ」というのはちなみにギリシャ語では女性名詞です。ですからペテロは男性ですから、ペテロでないことは明らかです。ペテロの方は、ペテロスとギリシャで言って、こちらは男性名詞です。やはり「岩」という意味です。でも、ペトラという女性名詞から比べるならば、岩盤から比べるならば、ペテロの方は、ペテロスの方は、まるで石ころのようなものです。シモンという「うごめく砂」よりは安定していますけれども、ペテロは所詮ペトラに比べるならば石ころのようなものであります。ですから、ローマカトリックはこの辺を、多分分かってはいると思うんですけれども、もう伝統的な解釈で、これをペテロと解してしまったので、ペテロの後継者であるローマ教皇が教会の土台である、教会の頭であるというふうに理解してしまいました。この岩盤、ペトラという女性名詞は、ペテロがイエスのことを正しく

評価した信仰告白というものであります。生ける神の子キリストであると。このような信仰告白は揺るがない岩盤のようなもの、ペトラであります。この岩の上に教会は建っていきます。教会というのは、イエス・キリストを生ける神の子キリストを信じる者たちの共同体です。で、それはうごめくことのない、がっしりした、岩尾の上に立つ、びくともしない共同体です。事実この後に『ハデスの門もそれには打ち勝てません。』と書いてあります。「ハデスの門」というのは、端的に言うならば、地獄の権威も、“門”というものは力・権威の象徴です。) そのような地獄の力も、教会の前には全く無力である。教会を揺るがすことも出来ないんだ、というのがイエスの言明であります。

「で、あなたはシモンですが、うごめく砂ですが、今あなたは私が誰であるのかを理解した。あなたは私のことを生ける神の子キリストであると、正しく評価した。だからあなたはペテロであると。揺るがないものであると。不動のものとなった。」と、このようにイエスはおっしゃって下さいました。何が言いたいと言いますと、イエスが誰であるのかということを理解しますと、あなたは自分のアイデンティティーというものを初めて知ることが出来ます。自分が本当は何者であるのか、ということ、イエスを正しく理解する時に、イエスが何者であるかということ、信じる時に、初めて分かると言っているんです。

世の中には自分のアイデンティティーが分からないという人たちが大勢います。溢れています。皆さんの周りも居ると思います。何者かが分からない。その状態をアイデンティティー・クライシスとも言います。「不安で不安で仕方がないんです。私は一体何者なのでしょう。自分は誰なのでしょう。」特に在日の人たち、日系と呼ばれる人たちは、このようなアイデンティティー・クライシスというものによく悩むと言われます。自分の国籍は一体どっちなのか。何人なのか。どっちに帰属したらいいのか分からない。自分がどこに属するのか、どこにも合わないような気がする。そのようなアイデンティティー・クライシスは人を不安にさせ、人を悩ませます。

そこで人はどうするかというと、つつい周囲に合わせようとして、周りに合わせようとするわけです。そのことで自分のアイデンティティーを掴もうとする、見つけようとする。そしてそれをなんとか保っていきたくするわけです。特定のグループ、特定の組織、そこに属そうとします。特定の流行に自分を合わせようとして、ですから、日本人を見てみて下さい。大体若者たちもそうですけれども、皆同じ様な服装をしています。皆同じような髪型をしています。皆同じような髪の色をしています。そして皆同じようなブランドを持ち歩いています。皆同じ様な言葉遣いをします。なぜでしょうか。それは自分のアイデンティティーが分からないので、何とかしてある特定のグループ、仲間に入って、そして特定の流行に自分を合わせることによって、自分が不安でいることを避ける。また、自分のその本当のアイデンティティーというものをそこで何とかしてでも掴みたいということから人々は、そのように周囲に合わせようとして、溶け込もうとするわけです。アイドルファンなんかを見て下さい。そのアイドルのような格好をし、アイドルのようなライフスタイルを送ろうとします。昔は例えば安室奈美恵とか、そういうファンのことを“アムラー”と呼んだり、本当にそのようなアイドルの格好をする。そして特定のグループに属することで、安心感を持とうとする。私たちは仲間だと。そして自分が何者か分からない人たち、そしてどこから来てどこへ行くのかも分からない、何のために生きてるのかも分からない、そういう人たちは何とかしてそのような特定のグループなり、特定の流行というものに合わせようとして。しかしその中で流行も変わります。昔は例えば私個人の話としますと、私が若い頃は髪型はリーゼントでした。あまりソリコミを入れすぎたのでだいぶ薄くなってしまいましたけれども、それは冗談ですが。その当時はそれが格好いいと思っていました。その当時はそれが自分自身を一番よく表す髪型だと思っていました。いろんな格好もしましたけれども、今から思えば笑い話というか、馬鹿らしい話で、恥ずかしい話でもありませんけれども。人目を気にしながら、周りに合わせようとして、でもその流行は変わりますから、その都度

自分も変えなければいけない。振り回されていくわけです。で、だんだん周りに合わせることに疲れてきます。いつも人の動向ばかり気になるようになります。今年のトレンドは何なのか、今年の流行は何なのか。すぐそういうことばかりに目を活かせますので、お金もかかりますし、労力もかかりますし、毎回毎回ころころ変わることにだんだん疲れてきます。でも皆と同じでないとか何かバツが悪い、何か不安で不安で仕方がない。そして私たちは背伸びしてでも格好つきたいと思うわけです。そのようなアイデンティティを失っている人たちは私たちの周りには大勢いると思いますし、私たちの中にもひょっとしたら今まさに私はそのような考えを持っていますと言う人もいるかもしれません。それが普通だと思っていた人もこの中にはいるかもしれません。ちなみに日本人のアイデンティティというものを今皆さんに考えて頂きたいと思います。日本人を定義するという事なんですから、これはなかなか難しいことだと思います。その起源をどこに見るかによってこれは変わってくると思います。長い歴史を遡^{さかのぼ}って、日本は島国で昔から稲作文化の中で育ってきた。稲作文化は皆で種をまいて、皆で収穫をする。家・村・国といったそのようなアイデンティティ、村落共同体というものを営んできたわけです。そのような日本人のアイデンティティ、日本人観というものを見る人もあれば、いや日本は武士社会であったということで、これに基礎を置いて今日の近代国家は今築かれているんだと見る人たちもいると思います。まあ、皆さんの中には戦争を知っている世代も何人かこの中におられますけれども、太平洋戦争において戦死した約300万人とも呼ばれている人たちが最後に語った言葉、叫んだ言葉は何であったでしょうか。お国のために、天皇陛下のために命を散らしていった若い兵士たちが、最後に叫んだ言葉。死ぬ間際に叫んだ言葉は何であったのか。「天皇陛下万歳。」ではありませんでした。もちろんそう叫んで死んだ者も多少はいたと思いますけれども、でも大半は何であったのか。もちろん私は直接は知りませんが、読む文献には「お母さん、お母ちゃん。」そうやって人々はお国の為で戦地に赴いたにかかわらず、最後に思い浮かべたのはお母さんの顔。最後に思い浮かべたのは家族の顔。それが日本人のアイデンティティを如実に表していると思います。実際に兵士たちは「天皇陛下万歳。」と叫ぶ暇もなく、「お母さん、お母ちゃん。」と言って死んでいきました。ですからそういったところからも、日本人のアイデンティティというのは、深層心理は本当に死ぬ間際になってハッキリ分かります。死ぬ間際になって自分が何者であるのかがハッキリすると思いますけれども、でもそこまで待たずとも私たちは自分たちが何者であるのか、本当はどこに属する者なのか、本当はどこに属していれば安心なのか、安全なのか、満たされるのか、幸福なのか、知っておく必要があると思います。ただ戦争時は、正式には日本人のアイデンティティというのは、当然天皇を頂点とする神国、神の国、日本であったわけです。ところが戦争が終わって敗北しますと、アイデンティティの混乱が生じたわけです。それまでは天皇陛下が、現人神が絶対であったわけですが、天皇が人間宣言をしてしまいました。もはや日本は神の国ではなくなってしまったわけです。自分たちのアイデンティティが失われて、自分が何者であるのかが全く分からなくなってしまった混乱の時代です。でも日本人はその中でキリスト教にも出会うことが出来ました。日本の歴史を振り返っても戦国時代にはキリシタンの時代、これはローマカトリックです。そして明治期にはプロテスタントというキリスト教に出会ったわけですが、その時には多少なりとも混乱がありました。その時には多少なりとも本当の自分に出会えた人たちが日本人の中にも起こされました。実際に戦後の日本においてアイデンティティを失った者たちは、イエス・キリストに出会うことによって本物のアイデンティティをつかむことが出来、そしてその混乱期にあって極貧生活の中でも本当に支えられ慰められ力づけられたという人たちも日本人の中にはおりました。でも実際には今日プロテスタントの人口は日本の全人口に対しては0.2%に過ぎません。ほとんどの人たちはイエス・キリストを知りません。イエスが神の子キリストであることを知りません。で、これは何を意味するかというと、ほとんどの人たちは自分が何者であるかを知らないと言っているわけです。かつての日本は先ほども話したように、現人神である天皇を中心とした神の

国、日本を自分のアイデンティティーとしておりました。でも今はその戦前、戦中に日本は戻ろうとしております。大東亜共栄圏、八紘一宇というその思想にまた日本は傾こうとしています。そのような話を今したい訳じゃないですけども、日本はその様な混乱を通りながらも、その後は経済大国へと上り詰めたわけですが、折角イエス・キリストに出会えた、キリスト教に出会えたのに、折角世界には類を見ない新しい憲法を持って、この国は戦争をしない国なんだと。軍隊を持たない国なんだとしたのにもかかわらず、米ソ 2 大国の冷戦の間においてだんだん自衛隊を持つようになり、そしてまた自衛隊からさらには今度はまたかつての大日本帝国の軍隊のような、そういう憲法の理念からはまた逸脱して、古い鞆まげに戻ろうとする。まあ、そういう動きがある中で、日本人は一体何者であるのか。現代人はますます混乱するばかりであります。戦前の日本へ帰ろうとするそういう動きもあれば、若者たちの中ではそんなのはよく分からないし、まっぴらだという人たちもおります。その功利主義の中でお金さえあればそれでいいじゃないか、何が得で何が損であるのか、そこだけで人を測る、人生を測る。そのような物差しを持って生きている、いろいろな人たちが今日本の中には混在して、一体日本人とは何者なのか。そのアイデンティティーがますます混乱しているわけです。ですからなかなかこの日本人とは何かという議論は千差万別で、なかなか 1 つに絞られてこないんですけども、1 つ皆さんにご紹介したい有名な日本人論というのがあります。それはアメリカの文化人類学者であるルース・ベネディクトという人が、ちょうど 1946 年、戦後の日本人の皆さん、その世代の人たちもいると思うので、その人たちにも馴染みのある『菊と刀』という本が、日本人論の有名な本でありますけれども出版されました。『菊と刀』という本です。その中に日本人の文化について、欧米の文化との比較がなされながら語られているものがあります。日本人というのは「恥の文化」であって、欧米人の文化というのは「罪の文化」である。まあ、そのような対比がなされることで日本人とは一体どういう人たちなのか、どういう文化を持った人たちなのか、ということが語られております。この「恥の文化」というのは一体どういう事かと言いますと、他律的な「恥の文化」というものは生理というものよりも、むしろ名誉というものが優先されるもの。個人の道徳心というものは、他者に左右されてしまうようなもので、非常に問題であるということがルース・ベネディクトの『菊と刀』という本の中で述べられています。ですからどちらかというとならば欧米の「罪の文化」の方が優れていて、日本の「恥の文化」の方は問題があるという書き方がされています。それは日本人にとっては、あまり面白くないというふうにとられるものでありますけれども、賛否両論ありますが、ただこの中に私は真実もあると思います。戦時中の日本の文化には確かに問題がありました。天皇を絶対者とする、現人神とする、日本を神の国とする、日本がこのアジアをまとめる国だということには、なかなか問題があったと思いますので、その問題をルース・ベネディクトという人が指摘したわけです。「恥の文化」これが日本の文化であり、「罪の文化」これが欧米の文化であると。その違いも知らない方に今少しお話ししたいと思うんですが、「恥の文化」というのは端的に言うと、人に迷惑さえかけなければそれで良いという考え方です。皆さんもそのように自分の親から、お爺ちゃんお婆ちゃんから習ってきたかもしれません。人様に迷惑をかけないように。恥ずかしいことはしないように。それを道徳基準とするものです。その一方で「罪の文化」というのはどういうものかというとならば、神様と人間との関係というのを重視して、これは神の言葉である聖書を道徳の基準とするものであります。「恥の文化」は水平的なイメージを持たせるものです。一方で「罪の文化」というのは垂直です。神と人間という垂直の関係。「恥の文化」は隣の人、周りの人、水平的な関係を表すものです。横の関係です。縦の関係が「罪の文化」であります。人に迷惑をかけないという道徳基準というのは、実際には大きな社会問題となっている、例えば女子中学生による援助交際(いんぎょ)に答えを与えることは出来ません。なぜならば、そのような援助交際を行っている女子中学生は、「誰にも迷惑かけていないんだから。減るもんじゃないし、何が悪いの。」と。その性倫理、性道徳に対して「恥の文化」は結局何も力を持つことが出来ません。なんでそれが悪いのか。どうして人を殺してはいけないのか。迷惑をかけなけれ

ばそれで良いということで解決しますが、じゃあ自殺はどうでしょうか。「人に迷惑をかけないでひっそり死ぬのはいいじゃないですか。」「恥の文化」では自殺というものは良いか悪いかという判断をすることが出来ないものとなってしまいます。

で、日本の「恥の文化」はどのような土壌で育ったかということ、それは汎神論という世界で生まれ育ったものです。汎神論というのは難しい言葉に聞こえると思いますがけれども、簡単に言えば「皆誰でも神様です。人間も神です、天皇陛下も神です、そして山や木や湖や海も皆何もかもが神様です。」それが汎神論の世界であります。そして先ほども日本は、島国の稲作文化であったということもお話しました。全村あげて皆で種をまいて、皆で収穫をする。機械の力がない時代は、これは相互協力がなければ絶対に収穫を、安定した収穫を期待出来なかつたわけですので、とにかく横の関係、人間関係、これを絶対のものとしてきたわけですね。で、そこから家、村、国といった村落共同体が絶対的なものとして、これがピラミッドの階層を作り上げたわけですね。から家、村、国というものです。ですから共同体の中で、和をもって貴しとなす、聖徳太子の「和をもって貴しとなす。」その和の精神が何よりも尊ばれて、そして共同体の秩序を乱さないこと、これが一番大事なんだと、これが最も優先すべき事なんだというふうに教えてこられたわけですね。

ところが戦国時代にキリシタンや、明治時代のプロテスタントが入ってくると、そのような横の関係の中に縦の関係が入ってきたわけですね。神様も人間と同列ですね。自然と神は皆同じでした。ところが聖書の神、キリスト教の神は、そうした人間や自然、これを全てすべて超越した絶対者であります。日本人の頭の中には、経験の中には全くなかったものです。神様だって、人間だって、米だって、皆同じだった。ところがキリスト教の神は全世界を、宇宙を造られた超越したお方。この方は唯一無二の絶対者である。そこに縦の関係というのが新たに日本の中に入ってきたわけですね。そこで目が開かれた人もあれば、混乱した者もおったわけですね。それまではひたすら家、村、国。この規範を超えないように。でもキリスト教の神はそのような家や村や国を超えてしまう絶対的な超越者であります。家、村、国の中では自分を見つめるという必要性はなかったんです。自分はいつでも共同体の一員である。ところが絶対者である神様が自分の目の前に現れると、自分と神とのその自己の問題が生じてくるわけですね。自分は一体何者なのか、ということですね。で、国のためにひたすら頑張ってきた人たち。家のために生きること、これが個人の存在と関係を成り立たせてきたその日本人のアイデンティティーというものを揺るがしたわけですね。まあ、そういったものを今でも多くの日本人は引きずっております。さらにそれに拍車をかけたのが江戸時代の鎖国対策であります。ですから私たちは、日本人は皆そのような家、村、国といった横の関係だけを気にしながら、いつでも人目を気にしながら、皆と同じでなければいけない。違ったら悪いと、江戸時代にキリシタンが取り締まられたのは、そのような家、村、国の制度を揺るがすものだったからですね。それでは統治出来ない、そう思ったからですね。キリスト教という宗教が悪いのではなくて、そのような日本の社会が崩壊してしまうんじゃないかという恐れからキリシタンを弾圧しました。ですから、五人組制度というのが生まれました。向こう三軒両隣ですね。昔はそういうお互いに気にかけて、お互いにいつでも声を掛け合って、協力しあって生きてきた古き良き時代があったと、人は言うかもしれませんが、実際にその向こう三軒両隣の考えというのは五人組から来ています。目を光らせて、もし隣近所にキリシタンがいたら通告しなければいけない。で、通告すればお金ももらえる、報奨金ももらえる。もし万が一自分の近所にキリシタンがいたら、自分も連帯責任を負わされてしまう。それが五人組という制度ですね。それが今私たちの属している自治体にも残っています。自治体の中に『組』というのがあります。それはすべて江戸時代の名残ですね。皆で協力し合ってどうのこうのと言う話ではないんです。本来はキリシタンを摘発するための政策が、その『組』の由来であります。まあ、それは今はもちろんキリシタンをあぶりだすような事はないかも知れませんが、実際に家、村、国というその共同体が、日本人のアイデンティティーだ

と未だに信じて、そういうものが残っているわけですが。ただ、それらが招いたこと、その歴史ははっきりしています。それらが招いた事は、江戸時代であればそれは徳川幕府による、絶対君主による統治であって、言論の自由は、宗教の自由は、信教の自由はなかった時代。で、それはそのまま明治政府にも受け継がれました。その時代が古き良き時代だと本当に言えるでしょうか。

で、私たちは今は信教の自由があります。ところが私たちのアイデンティティーはもう失われてしまっているのです、ある人たちはもう一度古き良き日本に戻ろうじゃないか、もう一度天皇を中心とした神の国日本を形成しようじゃないか。ふるさとニッポンだとか昔からやっていました。ある総理大臣は日本のことを神の国だとも発言しました。そのようにして失われてしまっているアイデンティティーを何とかして取り戻そうというのが、今の日本の社会です。若い人たちはそんなことなど分かりません。でもどこかに属していたいから、同じ髪型をして、同じ格好をして、同じブランドものをひっさげて、そして同じ流行の中で安心して仲間意識を持っていたい。いつでも携帯電話で繋がっていたい。そうすることで不安や恐れ、自分が何者であるのか、そうした帰属意識を安心して持てるように。それが多くの若者たちの間でなされていることであります。

まあ、そのような日本人論というものは、実際に今日の社会問題ともなっていると思います。それが分からないので私たちは混乱して、そしてこの日本の恥の文化というもの。そして欧米のキリスト教をベースとした罪の文化。それが混在して一体何が何だかよく分かりませんということになってしまっていますけれども、今日のテキストではイエス・キリストが誰であるのか。それを知ることによって私たちは真の自分に出会うことも出来るということを教えられております。ですから是非今朝皆さんの中で自分は一体何者であるのか。日本人であることは分かっています。でも日本人であることすら何なのか分かりません。そういう人はきっと疲れていると思います。いろいろなものに振り回されてきてしまって、本当に落ち着きたいと思っています。そういう人々にはグッドニュースがあります。是非イエス・キリストが誰であるのか。ペテロと同じように、イエスは生ける神の子キリストである。救い主なる神であるということを知って欲しいと思います。聖書によればこのイエス・キリストはすべてのものを造られたお方です。創造主ということです。私たちはこのイエス・キリストによって造られたものです。造られたものということは、もちろん目的があって造られたわけです。ただ偶然に生まれたのではありません。私たちはアムーバから生まれたのではありません。私たちの先祖は猿ではありません。偶然の産物ではないんです。進化論によれば私たちは偶然の産物ですから、何の意味も目的もない、居ても居なくても良い存在、何のアイデンティティーももたらしません。でも聖書によればすべてのものは神によって造られたと。あなたも私も神によって造られたという事は、神様はあなたにアイデンティティーを与えているんです。あなたは何者であるのか、何のためにこの世に生まれてきたのか、そしてあなたは何処へ向かって行くべきなのか。その行き先も神様が教えて下さいます。ですからイエスが本当に生ける神の子キリストであるとあなたが信じるならば、あなたは今人生の意味も目的も知ることが出来ます。そして聖書によれば人間は神のかたちに似せて造られたと言われています。これは文字通り神のかたちといえば、イエス・キリストのかたちです。イエスは人となられた神です。天皇とは全然違います。本当の現人神です。日本は人が死んだら神様にされて祀り上げられる事はありますけれども、イエスはもともとイエスではなくて、神の子、子なる神、三位一体の第二位格と呼ばれるお方で、この方が人のかたちをとってこの世に来て下さったことがクリスマスであります。ですからイエスは人となられた神です。そして 100%神ではあるんですが、100%人間でもある、非常にユニークなお方です。このような神は他には類を見ません。

まあ、そのイエス・キリストは何のために私たちと同じ人間の姿をとってこの世に来て下さったのかと言いますと、クリスマスの意味にもなりますけれども、それは私たちが失ってしまったそのアイデンティティーを取り戻すためです。聖書的な言い方をすれば、私たちのうちに本来あるはずの神のかたちが

今崩れているんです、歪んでいるんです。だから私たちは自分が何者であるのか分からないんですが、じゃあ何が私たちのアイデンティティーを失わせてしまったのか。何が私たちの神のかたちを崩してしまったのか。聖書によればそれは罪であると言われていました。罪というのは端的に言うと、この創造主を、このイエス・キリストを神と認めないことです。ですから私たちがこのイエスを生ける神の子キリスト、救い主なる神と認めるときに、初めてその罪が問題となっていることに気づきます。それが欧米の文化という「罪の文化」というものです。神との関係が問われるわけです。

そしてなかなか私たちは、だからといってもその罪というものをどうしたらいいか分からないわけです。問題が分かっても、原因が分かっても、じゃあこの罪を一体どうしたらいいの分かりません。この罪がもたらしたものの、神のかたちが崩れているが故に、自分のアイデンティティーが分からないが故に、私たちが生きてきたその結果です。自分も傷つけただけじゃありません。人も傷つけてきたわけです。神様を知らないが故に、認めなかったが故に、私たちは自分を中心として、自分をまるで神のようにして好き放題やってきたわけです。その結果もたらしてきたもの、それが罪の結果というものです。これについては私たちは取り返しのつかないことをしてきてしまいました。それを過去をもう一度取り戻してやり直すことは誰にも出来ません。今現在でも自分の罪が、実際に私たちに苦しみ、愛する者たちも苦しめたりしてしまう。それを自分ではどうにもならない、その現状を見るわけです。それに対して神様は何もしないでおられたのではなく、そのためにまさに神はひとり子イエス・キリストを送って下さって、私たちと同じ人の姿をとらせて、そして私たちが負いきれないこの罪を、払い切れない罪の清算を、この罪のないイエス・キリストにかわりてに負わせて、そして十字架の上で死なせて下さいました。十字架の死というのは、まさに私たちの罪を背負って死なれた贖いの救い主の姿であります。それは単^{ひとえ}に罪によって破壊された神のかたちをもう一度修復し、神との壊れた関係をもう一度回復するもの。言い換えれば私たちの本来のアイデンティティーを取り戻すものでありました。罪によって失った神との関係。私たちの内にあっただけの神のかたち。それがイエス・キリストの十字架の死によって、もう一度回復されました。イエスの十字架の死というものは、あなたのすべての罪を贖うものです。イエスがそこで流された血は、あなたのすべての罪を洗い清めるものです。そのことを信じるならば、すなわち自分の罪のためにイエス・キリストはこの世に来てくださって、そして十字架の死にまで従ってくださった。そのことを自分のためであったと信じるならば、あなたは神のかたちを取り戻すことが出来ます。自分のアイデンティティーは初めてそこで分かるようになります。自分は神様によって造られた。ちゃんと目的が与えられて、何のために生きているのか、どこから来てどこへ行くのかが、はっきり分かる。そして死んでもなくなる永続の命を持って神の国、(日本じゃありません。) 本当の神の国、本当の現人神がおられるイエス・キリストの国。そこに私たちは属するべきだということがはっきり分かります。聖書には、私たちの国籍は天にあると言われていました。日本人でありながらも、イエスを信じるならばその国籍は天にあると。天国人だと言っているわけです。それを知るならば私たちはもう怖いものなしです。病気になる、何か事故や災害や死を目前にしたとしても、私たちは恐れる必要はありません。健康を失って老いても、何も不安になる必要はありません。なぜならば、あなたは今真のアイデンティティーを手にしたからです。イエス・キリストを信じるものは、死んでもなくなる命を頂き、その者は本当の故郷に、本当の自分の祖国に、神の国天国に行くようにその道ぞなえがされているからです。死も通過点に過ぎないということを知ります。死がすべての終わりではないんです。死は天国に行くためのただの通過点です。通り道に過ぎない。気楽に過ぎていけます。「私は死ぬのが怖くて仕方がありませんでした。私は何の為に生きているのか分からなかったんです。本当に何をしても虚しいんです。どんな快樂にふけても、お酒を浴びるように飲んでも、麻薬に手を出しても、どんな娛樂でも私の心を結局は満たすことが出来ませんでした。このまま私は死ぬだけなんではいしょうか。」本当は私たちは神様によって造られた者ですから、あるべき姿は神の命を頂いて、神

とともに生きること。神の子どもとされること。イエスを信じる者は、イエス・キリストの花嫁ともされると、聖書は約束しています。それがあなたのアイデンティティーです。生ける神の子キリストであるイエスを信じる者が集まるところ、それが教会というところです。ですから私たちはこのように教会に集まっているのは、ここが私たちの家だからです。これは宗教儀礼でクリスチャンになったら毎週のように礼拝に行かなきゃいけない、教会で何か奉仕をしなきゃいけない、献金をしなきゃいけないのではなくて、そうではなくてこれが私たちのアイデンティティーだからです。これが私たちの帰属すべきところだからです。もちろん目に見えるこの地上の教会が全てではなくて、天国に本当の教会がありますけれども、この地上の教会はその天国へ向かうための足がかりに過ぎません。これは天国の本当の教会の影のような存在です。ですから私たちは、今はイエス・キリストを信じることによって自分が何者であるのかということが分かりました。そしてこれまで周りに合わせよう、合わせようと、皆と同じでないと不安で仕方がなかった。そういうところからも解放されて、そのような束縛からも一切解放されて、今は自由になりました。もうこの年末年始、お酒を飲まなくてもいいんです。言い方を変えれば、クリスチャンはお酒を飲んでもいいんですが、飲まなくてもいいんです。お酒を飲まないとやっていけないという状態から、お酒を飲まない人と付き合えない、本音を話せない、そのような堅苦しい窮屈な生き方からも解放されます。

「来年はどのような年になるか分かりません。これから色々経済的な負担も増えるでしょうし、健康不安もあります。どうしましょう。来年のことを思うだけで、今年1年不安で不安で、本当に「あけましておめでとう。」と心の底から言えるようになりたいです。」と言う人もいるかもしれません。でも今日、遅くはありません。イエス・キリストをあなたが「生ける神の子キリスト」と信じ、心に受け入れるならば、あなたの来年は本当に祝福に満ちたもの、何も恐れも不安もないもの、平安に満ちたもの、希望に溢れるものに変えられます。そのことを聖書は約束しておりますので、是非その約束を信じて自分のものにして頂きたいと思います。

もう一度テキストの**マタイの福音書 16章**に戻って頂きたいと思います。15節のところに『イエスは彼らに言われた。(とあります。今イエスはあなたにも言われています。)「あなたがたは(あなたは)、わたしをだれだと言いますか。」(イエス・キリストをあなたは誰だと言いますか。)]「生ける神の御子キリストです。」と、あなたが今心で信じて、口に出して告白するならば、あなたは救われます。救われるということは、自分の本当のアイデンティティーを持つことが出来るということです。救われるということは、死んでもなくなる永続の命をもつということです。救われるということは、あなたは地獄に行かず天国に行くということです。救われるということは、神の子どもとされ、キリストの花嫁とされて、永遠に終わらない幸福を手にするということです。もはや死も怖くありません。病気も恐れるに足りません。経済危機も、家族の崩壊も、何も恐れるに足りません。あなたの本当のアイデンティティーをイエス・キリストを知ることによって得るならば、何もあなたを揺るがすものはありません。あなたはペテロです。岩になります。それまでは動く砂で、不安定で、常に周りに合わせる流砂のような存在だったかもしれません。でも、あなたはもう揺るがないもの、イエスを生ける神の子キリストと告白したことによって得ることが出来ます。是非「今、私の心は全くうごめく砂です。不安定です。ふらついています。地に足がつかないような生き方をしています。あっち行って、こっちへ行って、流行に振り回され、周りに振り回され、人の言うこと、学校の言うこと、会社の言うこと、親の言うこと、近所の人言うこと、いろんな人に振り回されています。親戚の言うこと、上司の言うこと、職場の同僚が言うこと、そういったものにいつも気にかけて、いつも人の目ばかり気にしています。人の動向ばかり気にしています。もう私はそんな生活は飽き飽きしました。もう嫌です。もう疲れました。」是非イエス・キリストを知って欲しいと思います。

最後に祈りたいと思いますが、是非この中で自分の本当のアイデンティティーを見出したいと言う方がいらっしゃれば、今がチャンスです。今年最後の礼拝ですけれども、あなたは神様によってこの場所に今

朝招かれた人です。この招きはあなたの永遠を左右するものです。このイエス・キリストをどう見るかによって、あなたの運命は左右されます。永遠の運命が左右されるんです。死活問題以上です。なぜならば、天国に行くのか、地獄に行くかでは、これは大きな違いです。天国というのは、神様と永遠に共に過ごすところ。地獄というのは、神様から永遠に引き離されて過ごすところです。今、神様を知らなければ、あなたは神様とは交わりが持てない、繋がっていない。だからあなたは神のかたちを失ったままで、自分の本当の姿が分からずに、何のために生きているのかが分からずに、不安で不安で仕方がないんです。死ぬのが怖くて仕方がないんです。なぜ死ぬのが怖いのか。死んだらその後どうなるのか分からないからです。どうせ皆死ぬわけですから、本当は死ぬ事は怖くないはずなんです。でも、その後がどうなのか、自分は一体どこ行くのか、分からないから不安なんです。でもイエスを知るならば、もうバッチリ分かっています。私は胸を張って確信を持っています。今、今日ここで死んでも、この帰り車の事故で死んでも、何の後悔も何の未練もありません。私は最高の場所に行くことを知っているからです。天国へ引越し出来るからです。皆さんも同じ希望、同じ確信を持って欲しいと思います。この救いの保証を今持っているか、持っていないかでは、人生は大違いです。

最後にその救いの招きに応えるために、お祈りを皆さんとともにしたいと思いますので、この確信を持っていない人たちは、是非私の祈りに合わせて共に心の中で祈って欲しいと思います。そして是非お祈りが終わって、「もっと知りたい。本当に自分もイエス・キリストを生ける神の子キリストとして信じて、本当のアイデンティティーを持って余生を送っていきたい。」そう願っている者たちは是非遠慮なく私のところに来て下さい。その確信をもっと欲しいと言う人は、是非礼拝の後でも来て欲しいと思います。では、早速今皆さんにもチャンスを与えたいと思いますので、心を合わせてお祈りして欲しいと思います。自分で祈れない方も、私の祈りを自分の祈りと思って、心の中で共に唱えて欲しいと思います。そうすればあなたは今日この瞬間に本当の神に出会い、そして本当の自分を取り戻すことが出来ます。では祈りましょう。